

『愛玩動物看護師カリキュラム準拠教科書3巻 動物感染症学』（改定第2版第1～3刷）

訂正とお詫び

掲載記事中、以下の記事に誤りがございました。ここに訂正させていただくとともに読者の皆様及び関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

株式会社 EDUWARD Press

2024年12月27日作成

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
P10	第1章-2 表1-2-1内	「代表的な科」5段目	ブニヤウイルス科	ペリブニヤウイルス科
P11	第1章-2 表1-2-3内	表1-2-3 ウイルス科名4番目	ブニヤウイルス科	ペリブニヤウイルス科
P14	第1章-2 表1-2-3内	ウイルス科名8段目	ブニヤウイルス科	ペリブニヤウイルス科
P17	第1章-2 図1-2-4内	ssRNA(-)の模式図	ブニヤウイルス科	ペリブニヤウイルス科
P81	第1章6-1	図1-6-1-2	・エアロゾル (Small particle Aerosol) 5 μm 径以下	・エアロゾル (Small particle Aerosol) ※5 μm 径以下を削除
P81	第1章6-1	図1-6-1-2	飛沫 (Droplets) 5 μm 径以上滴状粒子	飛沫 (Droplets) 滴状粒子
P81	第1章6-1	check	<p>●飛沫</p> <p>① 5 μm 以上の飛散粒子</p> <p>② 到達距離は1～2mと考えられている。</p> <p>③ 解放型の動物飼育ケージの場合、最低1m以内は飛沫感染のリスクに対応する必要がある。</p> <p>●エアロゾル</p> <p>① 5 μm 以下の粉塵小粒子</p> <p>② 飛沫が乾燥して飛沫核がエアロゾルとなって空気中に浮遊する場合もある。</p>	<p>●飛沫</p> <p>① 一般的に5 μm より大きい滴状粒子をさす。</p> <p>② 到達距離は1～2mと考えられている。</p> <p>③ 解放型の動物飼育ケージの場合、最低1m以内は飛沫感染のリスクに対応する必要がある。</p> <p>●エアロゾル</p> <p>①微細な粉塵小粒子</p> <p>② 飛沫が乾燥して飛沫核がエアロゾルとなって空気中に浮遊する場合もある。</p>
p.163	第1章8 動物感染症演習問題の解答	問3	正解③ 先天的に備わっている免疫系で、病原体のもつ分子パターンを認識して反応する。	正解② 先天的に備わっている免疫系で、病原体のもつ分子パターンを認識して反応する。

同上	同上	問 3	②生体防御レクチンは糖鎖と結合する酵素や抗体以外のタンパク質である。	③生体防御レクチンは糖鎖と結合する酵素や抗体以外のタンパク質である。
P216	第 1 章 101-3 真菌症 1. 皮膚糸状菌	病原体 3 行目	T.mentagrophytes	T.mentagrophytes
P230	第 1 章 102-4.	左 下から 6 行目	●アカバネ病は、妊娠牛がブニヤウイルス科	●アカバネ病は、妊娠牛がベリブニヤウイルス科
p454	第 2 章-5 寄生虫症の診断と検査	演習問題 問 5 選択肢④	猫の壺型吸虫症	猫の壺形吸虫症